

アンリ・ジル=マルシェックスによる日仏文化交流の試み

—1937年の日本における音楽活動をもとに

Henri Gil-Marchex: A French-Japanese cultural exchange through his musical activities

白石朝子

SHIRAISHI Asako

Henri Gil-Marchex was a French pianist who concertized around Europe in the first half of Twentieth century. He visited Japan in 1925, 1931(twice) and 1937, four times in total, giving concerts and lectures in various places throughout Japan.

His 4th visit to Japan was sponsored both by the French and the Japanese government. During his 4th visit, he gave 20 concerts and lectures in eight months. In addition to these activities, he engaged himself with musical and cultural exchange with prominent Japanese composers. Upon returning to France, Mr. Gil-Marchex wrote an article to one of the major French magazines reporting the development of the Western music in Japan, and about the Japanese traditional music as well.

I would like to place a special focus on Henri Gil-Marchex's 4th visit to Japan in 1937 to explore his influence on both Japan and France in minute detail.

キーワード : Henri Gil-Marchex, 西洋音楽受容 Reception of Western Music

日仏文化交流 French - Japanese cultural exchange, 国際文化振興会

1. はじめに

アンリ・ジル=マルシェックス (Henri Gil-Marchex 1894-1970) は、ディエメ (Louis Diémer 1843-1919) やコルトー (Alfred Denis Cortot 1877-1962) に師事し、パリ音楽院を首席で卒業後ヨーロッパを中心に活躍したフランス人ピアニストである。日本には1925、31(2回)、37年に訪れた。

日本における西洋音楽受容史研究では、これまで、官主導の教育のもとドイツ音楽偏重であった日本の音楽界に対し、ジル＝マルシェックスが 1925 年に近現代の作品を含んだプログラムを演奏して、衝撃を与えたことが言及されてきた¹。また、音楽分野以外においても、彼の来日に力を注いだ薩摩治郎八（1901-1976）の遺品の調査をもとに、薩摩とジル＝マルシェックスとの交流が紹介され、ジル＝マルシェックスが行った演奏会の詳細についても明らかにされつつある²。しかし、ジル＝マルシェックスが4度来日を重ねたにも拘わらず、それに関して掘り下げた研究は行われていない。

そこで、博士後期課程においては、日仏両国におけるジル＝マルシェックスに関連した資料を精査・分析し、彼の行った音楽活動と日本音楽研究を明らかにした上で、彼の音楽活動は日本の近代音楽史にどのような役割を果たしたかを見出すことを目的としている。

著者は、昨年度、ジル＝マルシェックスの 1925 年、31 年-32 年の日本における音楽活動と音楽界への影響について明らかにした³。本論では、1937 年のジル＝マルシェックスの日本における音楽活動について調査して、日本の音楽界への影響を明らかにする。

2. 1937 年の来日における音楽活動

(1) 来日目的と滞在日程

ジル＝マルシェックスは、1937 年 3 月 28 日、4 度目の来日を果たした。

彼は、今回も 1931 年の来日と同様にフランス政府の文化使節として日本を訪れたが、これまでと大きく違う点は、日本の音楽を欧州に紹介するために⁴、日本の外務省国際文化振興会の招聘で来日し、日本音楽研究を行なったことである。フランス政府ばかりでなく、日本政府からも援助を受けたことは、これまで日仏双方の文化発展を願って日仏文化交流を試みてきたジル＝マルシェックスの活動が、両国から認められて期待されたといえることができる。

今回の調査で判明したジル＝マルシェックスの音楽活動は表 1 のとおりであり、約 8 ヶ月間に行われた計 21 回の音楽活動が明らかになった⁵。また、この他にも東北帝國大學、武蔵野音楽学校で講演を行ったことが『日佛会館報告書』（1938）に記されている。

しかし、一方で、「ジル＝マルシェックスは日本政府の後援のもとに日本縦断の見事な興業を成し遂げた。彼は、60 を超えるリサイタルとレクチャーコンサートを全ての大都市と帝國大学、多くの私立大学で催した。」⁶と報道した新聞記事があり、多くの音楽活動を行ったことが推測されることから、今後も調査が必要であると考えている。

表1 アンリ・ジル＝マルシェックスの音楽活動(1937.3-11)

3月28日	入京	6月10日	東京商科大学
4月11日	華族會館	6月23日	東京帝國大学
4月24日	日本青年會館	6月26日	関西日仏會館
4月27日	華族會館	7月3日	海員會館
4月28日	華族會館	7月4日	華頂會館
5月11日	華族會館	11月9日	華族會館
5月12日	日本大学	11月12日	日佛會館
5月20日	早稲田大学	11月13日	関西日佛會館
5月24日	ラジオ出演	11月15日	慶応義塾大学
5月27日	明治生命講堂	11月17日	華族會館
5月28日	明治生命講堂	11月21日	退京
6月4日	丸ノ内保険協会		

(2) 華族会館における講演活動

ジル＝マルシェックスは、華族会館で一連の講演と演奏を行った。

『日佛會館報告書』(1938)によると、テーマは、『十六世紀ヨリ二十世紀ニ至ル欧羅巴舞踊音楽—アントアン、フランシスク及リュリイヨリロツシニ及シヨパン迄』

(4月27日)、『同一前回ノ續キ』(5月11日)、『巴里ニ於ケルシヨパンノ音楽生活』(11月9日)、『ドビュシイニ於ケル異國ノ影響』(11月17日)で、講演は「都度拍手ヲ博セリ」と報告されている。11月9日、17日に披露された曲目は、表2、表3の通りである。5月の講演に関しては後で詳しく述べる。

表2 11月9日・華族會館

シヨパン	ノクターン ト長調
	バラード ト短調
	エチュード 5曲
	マズルカ ロ短調
	ポロネーズ 嬰ハ短調
	子守歌
	前奏曲 6曲
	スケルツォ 変ロ短調
	別れのワルツ

表3 11月17日・華族會館

ドビュシイ	塔
	月光の降りそそぐテラス
	水の精
	金魚
	喜びの島
	グラナダのタベ
	帆
	西風の見たもの
	亜麻色の髪の乙女
	沈める寺
	ラヴィエヌ將軍
	ミンストレル

(3) 各大学における講演活動

ジル＝マルシェックスは、5月12日に訪れた日本大学を始め、早稲田大学、東京商科大学、東京帝國大学、慶応義塾大学、東北帝國大学、武蔵野音楽学校においても演奏を交えた講演を行った。そのうち、プログラムや反響などが明らかになった5大学における講演活動を日付順に紹介する。

① 日本大学

ジル＝マルシェックスは、本郷金助町芸術科大講堂において『作家ドビュツツイ[マ]と其の時代』と題して講演、演奏を行った。国際文化振興会の高田武郎の通訳によって、「三時間余りに亘る独奏講演に盛況を極めた聴衆は、幾度かジルマン・シェックス氏[マ]にアンコールを送った。」⁷

② 早稲田大学

ジル＝マルシェックスは、5月20日大隈大講堂において『民衆の現代音楽に及ぼしたる影響』と題して講演、演奏を行った。内容は後で詳しく述べるが、この講演には「駐日大使モール・アンリー夫妻、一等通訳官ボンマルシャン、参事官クナベル氏等も同伴来場、千余名あまりの學生とともに熱心に傾聴し…終了した時は拍手が鳴りやまず、聴衆全部起立して感謝の意を表するといふ空前の場面があつた…近来にない感銘深き科外講義として學生間より感謝状が殺到し学園當局を非常に喜ばせた」⁸と報告されている。

③ 東京商科大学

ジル＝マルシェックスは、6月10日兼松講堂において『民衆音楽が現代作曲家に及ぼせる影響[マ]』と題して講演、演奏を行った。『一橋新聞』第250号には「三科よりの學生を始め、音楽学校の生徒も多数出席して、盛況であつた、氏は演奏の順序に従ひ、十数曲を演奏しつつ説明した」と記されている。そのテーマから、おそらく早稲田大学での講演と同じプログラムで演奏したことが推測される。

④ 東京帝國大学

ジル＝マルシェックスは、表4のプログラムにより6月23日法文經第25番教室において『象徴主義時代の音楽

表4 6月23日・法文經第25番教室(東京帝國大学)

フランク	プレリュード、コラル及フーガ
リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
フォーレ	ノクターン 第6番
グリーク	ノクターン ヘ長調
サティ	サラバンド 第6番
ドビュシイ	沈める寺
	西風の見たもの
	月光がふりそそぐテラス
	バックの踊り
	ミンストレル
セヴラック	春の墓地のほとり(マ)
ラヴェル	夜のガスバル

生活』と題して、文學部學友会と帝大音楽部の主催により講演と演奏を行った。

『帝國大學新聞』第 680 号には、当日「日佛會館長マゾオ博士がジ氏の講演を鈴木健郎学士に全釋させたパンフレットを千部寄贈し…仏蘭西語を釋せぬ聴衆もそれがために、耳にジ氏の解説を聴きながら、明快な翻譯テキストを読み、その間に演奏される演奏されるピアノの名曲を味はひつゝ休息するといふ頗る複雑な態度を勞せずして持続し得た」⁹と記されている。また、講演を聴いた辰野隆は、「近代の仏蘭西音樂に對する場合には、詩魂と繪ごころとが欠くべ可らざるものであるからドビュシイやラヴェルの音樂を聴いて耳を楽しませると同時に、詩調とピトレスクをも味はひ得なければ演奏會は全しと謂ひ難い。ジ氏の演奏・講演は、緊る見地から、日本の音樂愛好者に新しい聴き方を教へるのであつた。」と指摘している。

⑤慶応義塾大学

ジル＝マルシェックスは、11月15日三田慶応義塾大學二十一番教室において『象徴主義時代の音楽界』と題して、三田フランス文學會慶応義塾塾監局主催のもと、井汲清治の通訳付で講演、演奏を行った。プログラムは、表5の通りである。

表5 11月15日・三田慶応義塾大學二十一番教室

フランク	プレリユード、コラル及フーガ
リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ
フォーレ	ノクターン 第6番
グリーグ	ノクターン へ長調
サティ	サラバンド 第6番
ドビュシイ	沈める寺
	バックの踊り
	雨の庭
ラヴェル	水の精 (夜のガスパール)
	亡き王女のためのパヴァーヌ
ジル＝マルシェックス	古き日本の姿二つ(ママ)

(4) 明治生命館講堂における演奏会

ジル＝マルシェックスは、5月27日、28日にフランス大使と日仏會館、日仏協会の後援により、明治生命館講堂で二夜連続の演奏会を開催した。演奏会で配布されたプログラム(写真1)には、ジル＝マルシェックス音楽会後援会員として、政治家、実業家、芸術家など14名の名前¹⁰が記され、ジル＝マルシェックスへの支援が示されている。

披露された曲目は表6、表7の通りである。この演奏会で、ジル＝マルシェックスが日本研究の成果の一つとして作曲した《古き日本の二つの映像 *Deux Images du Vieux Japon*》(表7・日本の情景 2曲)が日本初演された。

写真1 明治生命館講堂 演奏会プログラム

各大学における講演、演奏会が好評であった一方で、この演奏会に対して、野村光一は「ジルマルシェックス氏の洋琴獨奏は非音樂的なものである。氏の缺陷は、第一に、楽譜への相

表6 5月27日・明治生命講堂

ショパン	ノクターン ト長調
	バラード ト短調、へ長調
	スケルツォ 変ロ短調
ドビュシイ	版画 (全3曲)
	水の反映 (映像)
	金色の魚 (映像)
	沈める寺
	西風の見たもの
	月光が降りそそぐテラス
	ミンストレル
ショパン	練習曲 ハ長調、へ長調、変イ長調
	へ長調、変ト長調、ハ短調
	ワルツ イ短調、嬰ハ短調、変ニ長調
	ポロネーズ 嬰ハ短調、変イ長調

表7 5月28日・明治生命講堂

フランク	プレリユード、コラルとフーガ
フォーレ	ノクターン 第6番
シャブリエ	気まぐれなプーレ
セヴラック	春の墓場の一隅(ママ)
サンサーンス	ワルツ形式による練習曲
ジル＝マルシェックス	日本の情景2曲
ラヴェル	水の精
	亡き王女のためのパヴァーヌ
	フォックストロット
ミヨー	ブラジルへの郷愁
フーランク	無窮動
バルトーク	アレグロ・バルバロ
アルベニス	やしの木陰
	セギディーリヤ
グラナドス	スペイン舞曲 ホ短調
ファリヤ	粉屋の踊り
	火祭りの踊り
リスト	スペイン狂詩曲

Sous le haut Patronage de
S. Exc. M. l'Ambassadeur de France, de
S. Exc. M. l'Ambassadeur de Belgique, de
M. Mabon Franco-Japonaise et de
la Société Franco-Japonaise

ジルマルシェックス音楽会後援会員

(科楽部アンテナ) 氏

- 戸田 均
- (J. Bontmarchand
- 花柳 口 美
- 岩崎 小 彌 太
- 小林 千 代 子
- 黒 田 尚 樹
- 牧 山 幸 子
- 松 井 辰 四 郎
- J. M a z e n o d
- 岡 誠 風 雄
- 関 見 富 雄
- 大 倉 祥 七 郎
- 竹 長 勝 邦
- 大 塚 昌 人

當の不忠実にある。第二に、氏のリズム的観念の薄弱にある。第三に、旋律と強弱に対する氏の粗放にある。」と酷評した。

(5) 日本現代作曲家連盟の演奏会への出演

ジル＝マルシェックスは、自身の講演や演奏会に加えて、日本現代作曲家連盟の第3回作品発表会にも助演した。

プログラム(写真2)には、清瀬保二(1900-1981)、池内友次郎(1906-1991)、江文也(1910-1983)の作品を演奏したことが記され、『ドキュメンタリー新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち 1930-1940』(1999: 150-151)にも詳細が報告されている。

写真2 日本現代作曲家連盟 演奏会プログラム



(6) その他の演奏・講演活動

ジル＝マルシェックスは、日佛會館、関西日佛學館、海員會館、華頂會館でそれぞれ講演もしくは演奏会を行った。7月3日に海員會館で行われた演奏会は、捜真女學校同窓會関西支部主催であり、7月4日華頂會館で行われた講演会は、音楽文化クラブ主催、大阪毎日新聞社京都支局後援により、『民衆音楽のフランス現代作曲家への影響』と題して、市村恵吾の通訳付きで行われた。また、11月23日関西日仏學館で行われた講演は、『象徴主義時代の音楽生活』と題され、京都帝國大学音

楽學部と関西日仏學館の共催によるものであった。

資料から判明したプログラムは表8 - 表12の通りである。7月3日には大澤壽人(1907-1953)の作品も演奏されたことが明らかになった¹¹⁾。

表8 6月26日・関西日佛學館

フランスク	オルフェの宝物
バーセル	イギリスの踊り
クーブラン	お気に入り(2拍子のシャコンヌ)
ラモー	ミュゼット、リゴードンとタンブラン
バッハ	ガボット 二短調
スカルラッチェ	ジューグ ハ長調
モーツァルト	トルコ行進曲
シューベルト	ヴィンナ美人への讃歌
ロッシェニ	ヴェネツィアの踊り
ショパン	ワルツ2曲
	マズルカ 口短調
	ポロネーズ 変ロ長調
ムソルグスキー	ゴバックのダンス
グリーク	2つのノルウェイ舞曲
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリヤ	火祭りの踊り
バルトーク	アレグロ バルバロ
ドビュッシー	ゴリウオーグのケイク・ウオーグ
ミヨー	ブラジルの郷愁
ラヴェル	五時フォックス・トロット

表9 7月3日・海員會館

ショパン	ノクターン ト長調
	バラード ト短調、ヘ短調
	ワルツ イ短調、嬰ハ短調、変ニ長調
	スケルツォ変ロ短調
ドビュッシー	水の反映
	金色の魚
	沈める寺
	西風の見たもの
	月光が降りそそぐテラス
	バックの踊り
	ミンストレル
大澤壽人	丁丑春 三題
ファリヤ	粉屋の踊り
	火祭りの踊り
バルトーク	アレグロ バルバロ
リスト	スペイン狂詩曲

表10 7月4日・京都東山 華頂會館

シャプリエ	ブルー・ファンタスク
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリヤ	火の踊り(ママ)
フロコフィエフ	年老いた祖母の物語
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	グラナダの夕べ(版画)
	雨の庭(版画)
	ゴリウオーグのケイクウオーグ
	ミンストレル
セヴラック	春の墓場のほとり(ママ)
サティ	木製の人形の2つのスケッチ
ブーランク	無窮動
ミヨー	ブラジルへの郷愁
ラヴェル	フォックス・トロット

表11 11月13日・関西日仏學館

ドビュッシー	塔
	月光の降りそそぐテラス
	水の精
	金魚
	喜びの島
	グラナダの夕べ
	帆
	西風の見たもの
	亜麻色の髪乙女
	ゴリウオーグのケイク・ウオーグ
	ラヴィーヌ將軍
	ミンストレル

表12 11月23日 関西日佛學館

フランク	プレリュード、コラール及フーガ
リスト	海の上を歩くハオラの聖フランチェスコ
フォーレ	ノクターン 第8番
グリーク	ノクターン ヘ長調
ドビュッシー	沈める寺
	バックの踊り
	雨の庭
ラヴェル	水の精(夜のガスパール)
	亡き王女のためのパヴァーヌ
ブーランク	無窮動
ジル＝マルシェックス	古き日本の姿二つ(ママ)

3. ジル＝マルシェックスによる講演の内容

ジル＝マルシェックスが行った講演の中から、詳細が記された資料を入手することができた二つの講演内容について記す。

(1) 『十六世紀より二十世紀に至る欧羅巴舞踊音楽（第二講）—ショパン及びリストよりバルトック及びラヴェルまで』

ここでは、19ページに亘る原稿（写真3）をもとに、5月11日に行われた講座について紹介する。

ジル＝マルシェックスは、前回（4月27日）の講演で、ショパン（Frédéric François Chopin 1810-1849）の《ポロネーズ *Polonaise*》の演奏を行い、「どんな具合に十九世紀の舞踊音楽が古典時代には知られてゐなかつた國民感情の熱烈な表現形式をなすに到つたかをお話しかけたところで終わった」ため、今回の講演は、ショパンの《マズルカ *Mazurka*》の演奏から始まり、表13のような曲目を取り上げて講演を行った。

ジル＝マルシェックスは、まず、ショパンとリスト（Franz Liszt 1811-1886）について説明し、演奏を行った。ショパンの《マズルカ》は、西洋音楽にとって「伊太利、仏蘭西、独逸に生れた因襲のメロディーとリズムに依拠してきた伝統」を打破し、「欧州諸國各自の國民舞踊に還るといふ、十九世紀独特の現象を示しはじめた…烽火の如き」ものであったと紹介した。ショパンが「愛する波蘭に暮してゐた青春時代の追憶を偲びながら作曲した」マズルカを、シューマンの「花の蔭に隠された大砲である」という言葉を借りて、「ショパンの祖国を亡くした独逸と露西亞に向けられた大砲である」と述べている。一方、リストは、「デブシーの藝術に深い理解を示し…欧羅巴音楽精神の革命を齎した立役者の一人」であると紹介し、ジプシー音楽の特徴を「本質的に東洋風な溢るゝばかりのフィオリトゥーレ[マ]、自由奔放なリズム、転調なくして突如一つの旋法から他の旋法へと思ひも寄らぬ推移を示す」様式と述べ、曲を構成する「ラッサン」と「フリスカ」の部分の説明した。

次に、「他の民族調の舞踊曲を」紹介するために、「ゴパックというコサック舞踊」と「ノルウェーの春を呼ぶ踊り」を説明した上で、ムソルグスキー（Modest Petrovich Mussorgsky 1839-1881）とグリーグ（Edvard Hagerup Grieg 1843-1907）の作品を演奏した。それに続き、スペインの舞

写真3 華族會館 講演原稿

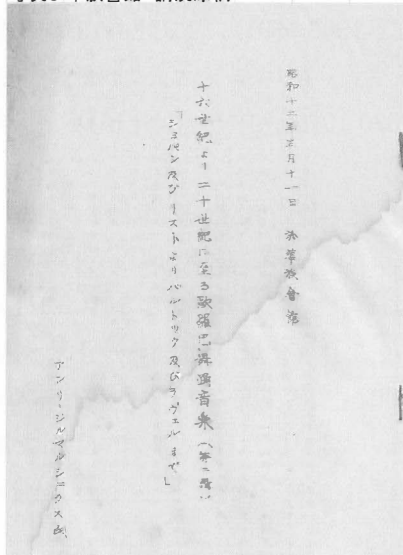


表13 5月11日・華族會館

ショパン	マズルカ
リスト	ハンガリー狂詩曲第2番
ムソルグスキー	ゴバックのダンス
グリーグ	ノルウェー舞曲（抜粋2曲）
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリヤ	火祭りの踊り
バルトック	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	ゴリウオーグのケイク・ウォーク
	ミストレル
	デルフィの舞姫たち
	バックの踊り
ミヨー	ブラジルの郷愁
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
	五時フォックス・トロット

踊について「極めて古いものであり…娯楽でも慰みでもなく…快楽ではなくして、已むに止まれぬ欲求を満たすもの、民族全体の言葉」であると述べ、アルベニス (Isaac Manuel Francisco Albéniz y Pascual 1860-1909) とファリヤ (Manuel de Falla Matheu 1876-1946) の作品を演奏した。

さらに、話をハンガリーへと移し、「1900年頃、匈牙利に一つの新しい動向が油然として湧起った…欧羅巴の影響を一切蒙らぬ古い傳統、教養ある人々からは顧みられない古い傳統が尚ほ匈牙利農民の間に伝えられてゐることを明確に指摘した」とバルトク (Bartók Béla Viktor János 1881-1945) の出現について説明した。「リストの匈牙利狂想曲[マ]にしる、ブラームスの匈牙利舞踏曲[マ]にしる、これは匈牙利音楽といふより寧ろジプシー音楽に属するものであり…音楽の創意は…匈牙利農民の粗野質朴な音楽藝術とは没交渉な當時流行のメロディーからヒントを得た」のに対し、バルトクの音楽は、「古い歌謡から一つの力強い独創性が湧き出た…彼の募りゆく憤怒につれて、殆ど痛々しさへも感ぜられるリズムの旋風である」と、彼らとの違いを強調している。

そして、ジル＝マルシェックスは、ドビュッシー (Claude Debussy 1862-1918)、ミヨー (Darius Milhaud 1892-1974)、ラヴェル (Joseph-Maurice Ravel 1875-1937) の作品を説明し、演奏した。ドビュッシーに関しては、「舞踊曲のリズムを存分に駆使する一方、浪漫時代に光榮を僭つたリズムはこれを出来る限り使用しないやうに心懸けた」作曲家であると述べ、「アメリカン・ニグロの踊りの節分されたリズムを怖れ気もなく借りて、愉しい皮肉な想像力を働かせた小さな傑作」である〈ゴリウォーグのケイクウォーク〉、「アングロ・サクソンの大衆に持囃された肌の黒さもとりぐの黒奴の気狂じみた踊手と歌手」を示す〈ミンストレル〉など4曲を披露した。次に、「タンゴのリズムを様式化した」ミヨーの作品を紹介している。そして最後に、ラヴェルの異なる傾向を示す2曲を演奏した。それは、「宗教舞踊」を示す〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉と「西洋芸術にアメリカン・ニグロの異国情緒を輸入した」作品であり、「黒人の演ずるジャズの音楽的描寫、欧羅巴が我を忘れて熱狂する如き激烈なリズムを伴ふ騒々しいオーケストラをピカソ風に描寫した」〈五時フォックス Trotto〉¹²であった。

以上のようなプログラム編成で講演を行ったジル＝マルシェックスは、最後にこのような言葉で締めくくっている。

「時代から時代へと文明は進化変装し、時に思ひかけない変貌を呈するけれども、我等はその千差万別な相貌の蔭に隠れた傳統の感性を明瞭に認識せねばならぬ…地球上の諸人種が彼らのその時々豹変する相貌の裏に潜めて、世代から世代へと継承していつた千古不変の感性…表現を音楽的立場から認識するためには、舞踊音楽がどれほど役に立つことであろう。…地球は極めて縮小された。遠く相距る國民同志のかうした近接が、國民各個の精神—舞踊音楽こそ常にその最も特異な表象の一つをなしてゐた—を破壊するやうな結果を招くことのないやうに希望して已まない。」

ジル＝マルシェックスは、舞踊音楽という一つの視点から西洋音楽を系統立てて語り、演奏することで、単に演奏を楽しむのではなく、作品を理解し、鑑賞することを求めたといえよう。

(2) 『民衆の現代音楽に及ぼしたる影響』

ここでは、講演で通訳を行った山内義雄氏によって記された、『早稲田大学新聞』掲載の3本の記事(写真4)をもとに、講演の内容を紹介する。

当日は表14のプログラムで進められた。

ジル=マルシェックスは、まず、19世紀以降の西洋音楽の歴史について以下のように説明している。

「ドイツ音楽がその全盛を誇った時代であり…僅かにリストとショパンだけが、これらと違った方向を示してゐた。…ドイツ音楽専制からの解放の第一聲は、最初先ずロシア派ムソルグスキーによつて挙げられた。ついで、シャブリエ、ドビュッシー、更にスペインの作曲家たちが続き、かうして次々にあらゆる國々の人々にとつて、自由な創造の世界、舊い、あらゆる専制的な主義から全く獨立した、自由な新しい世界が無限に展開されることになつた。」そして、講演テーマに関連して、「その國の民衆音楽を知るといふこと、それこそは、その國民の感受性について言語などでは到底あらはし得ないやうな深奥な秘密に至るまで、これをその深さに分け人つて突き止めさせてくれるものなのだ」と説明した。

演奏は、「フランスの國民的伝統のその最初の復興者の一人」として紹介されたシャブリエ(Alexis-Emmanuel Chabrier 1841-1894)の作品から始まった。続いて、「シャブリエの交響詩〈エスパニヤ〉やビゼー〈カルメン〉が一つの前触れとなつた…二十世紀初頭を飾るスペイン音楽の花々しい復活」について語り、「スペインのフォークロアについて種々重要な探求を試みた」音楽史家フェリペ・ペドレル(Felipe Pedrell 1841-1922)の、「彼の民族的源泉への復帰の諸説を身を以て行つた」ファリヤとアルベニスの作品の解説を交えて演奏した。

次に、ジル=マルシェックスは、ロシア音楽へと話を移し、「グリンカこそは、ロシアの民謡と西洋諸國の音楽形式との間に完全な統合を試みた最初の人である。そしてバラキレフ、ポロディン[マ]、セザール・クイ[マ]、ムソルグスキー、リムスキー・コルサコフ等ロシア國民音楽派を形式する人々がこれに続いた」が、ムソルグスキー以外の作曲家は、「ロシアのメロディに対し、ワーグナーの方法、またヴェルディ、或いはブラームスの方法を當てはめようとした」と批判した。そして、「ストラヴィンスキーがその初期において、そして現今ではプロコフィエフがロシアの民謡の魂にしつかり結び」ついたと述べ、プロコフィエフ(Sergei Sergeevich Prokofiev 1891-1953)の作品を演奏した。

続いて、ジル=マルシェックスは、バルトークの作品の特徴を説明し、演奏を行った後¹³、ドビ

写真4 早稲田大学新聞 第73号 昭和12年5月26日付



表14 5月20日・大隈大講堂

シャブリエ	ブルー・ファンタスク
アルベニス	2つのスペイン舞曲
ファリヤ	火祭りの踊り
プロコフィエフ	年老いた祖母の物語
バルトーク	アレグロ バルバロ
ドビュッシー	グラナダの夕べ(版画)
	雨の庭(版画)
	ゴリウオーグのケイク・ウオーク
	ミンストレル
セヴラック	春の墓場の隅にて(マ)
サティ	木製の人形の2つのスケッチ
プーランク	無窮動
ミヨー	ブラジルの郷愁
ストラヴィンスキー	ピアノ・ラグ・ミュージック
ラヴェル	五時フォックス・トロット

ユッシー、セヴラック (Marie-Joseph-Alexandre Déodat de Séverac 1872-1921)、サティ (Erik Alfred Leslie Satie 1866-1925) を順に紹介した。ドビュッシーに関しては「錦繪といふ日本の民衆芸術に対して何人にも負けないほどの賞讃を捧げて」おり、「日常卑近な情景を北斎風内至広重風に、といふのは寫実的ではあるが俗悪に流れず、簡素な卑俗に堕しない手法でこれを音楽的に表現しようと試みた」と述べ、2曲を演奏した。そして、ドビュッシーが次々と作品を発表する一方で、「フランクの弟子たちの率ゐるスコラ・カントルムでも、過去の音楽の中に現代音楽に対する指標を求めようとする企てが起こり…ワーグナーの音楽を防ぐためどうしても民族の聲に呼び掛ける必要、民謡をよく理解する必要を感じた」ため、「ダンディはセヴェンヌ地方とヴィヴァレ地方を、ギ・ロパルツはフレムやブルターニュを、シャルル・ボルドはバスクを、セヴラックはラング・ドック地方をと、各々地方的音楽の源流に遡つての研究が始められた」と説明し、「自然をその傳統的情感に即して美事に再現してのけた」セヴラックの作品を演奏した。

また、先に紹介したドビュッシーが「客観的に好んで道化師を描いた」のに対し、「自分自身が道化になり切ろうとし…晩年ミュージックホールやサーカスなどに示唆されて、明確な民衆藝術—あらゆる余計なお荷物をすつかり取り去つた民衆藝術を鼓吹しようとした」サティの作品を演奏した。

そして最後に「現今世界を征服しつくした民衆音楽の形式である」ジャズが「音楽の進歩に与えた影響の偉大さ」を述べて、ストラヴィンスキー (Fyodorovitch Stravinsky 1882-1971) とラヴェルの作品を演奏した。

ジル＝マルシェックスは、西洋諸国の作曲家の作品を取り上げることで、フランス音楽に偏ることなく近現代の作品の魅力を伝えたといえよう。

4. 日本人作曲家との関わりと雑誌 *France-Japon* への寄稿、日仏音楽協会の設立

ジル＝マルシェックスは、日本滞在中、日本現代作曲家連盟の演奏会に助演をするばかりでなく、日本の作曲家たちと交流を深め、フランスの雑誌で彼らを紹介し、日本音楽界の現状を伝えた。

彼は、「長い間、日本の音楽はドイツ音楽の足跡を追っていたが、私の一回目の滞在から日本は大きな進歩を遂げた。…以前には、日本はドイツ音楽の影響が支配的であったが、現在は、フランス、ロシア、スペインの作品が最先端であり、この影響はとりわけ良いもので、日本音楽を良い方向へ向かわせた。現在日本には、大変期待できる若い作曲家たちがおり、彼らの努力が結晶するだろうと感じられる。」¹⁴と述べた。そして、ジル＝マルシェックスが作品を演奏した清瀬保二、江文也、池内友次郎、大澤壽人に加えて、松平頼則 (1907-2001)、荻原利次 (1910-1992)、伊福部昭 (1914-2006) の名前を挙げて紹介している。

「松平はオーリックやプーランクに影響を受け…清瀬の音楽は、大衆の旋律とリズムに根源を置く。厳密には全く真似ていないが、荻原も同じ方法で作曲する。バルトーク、ファリャ、プロコフィエフは、お気に入りの作曲家らしい。同様の影響は激しい楽曲を作る江に発見され…彼は台湾で生まれたので、江は、日本人たち自身にとって、十分に異国的に見える。北海道、

すなわち東京のかなり遠くに住んでいる伊福部は、オーケストラをほとんど耳にしない…それにもかかわらず、信じられない巧みさでとりわけ交響曲を書く。私は彼（の音楽）にプロコフィエフやラヴェルを結びつける。このすべての作曲家が日本を離れず、その間に池内はパリの音楽学校でビューセルのクラスで学んだが、私達の国の確かな芸術を十分によく反映しており、大澤はアメリカで学んだが、シェーンベルクやベルクのポリフォニーの方法を彷彿させる。」¹⁵

そして、日本人作曲家にとっての課題は、「10世紀の初めからヨーロッパの芸術すべての基礎である和声と古来の日本音楽の特質を持った対位法のバランスを整えることである」¹⁶と助言した。

また、ジル＝マルシェックスは、*Société Franco-Japonaise des Amis de la Musique*（日仏音楽協会）の設立に関わり、自身も副会長の役職についた。この組織は、徳川頼貞が会長、池内友次郎などが実行委員を務め、1938年2月に設立されている。2月25日には、華族会館で「日仏交換音楽会」が開かれ、ジル＝マルシェックスによると、「プログラムはバラエティに富み、松平頼則《フルートとピアノのためのソナチネ *Sonatine pour flûte et piano*》、池内友次郎《古い日本の旋律にもとづくチェロのための幻想曲 *Fantasia pour violoncello sur violoncelle sur un air japonais ancien*》、清瀬保二《ピアノのための小組曲 *Petite suite pour piano*》、J.-B. Loeillet (1680-1730)《ピアノ、ヴァイオリン、チェロのためのソナタ 第13番 *Sonate No.13 en sol majeur pour piano, violon et violoncelle*》、R.Laparra (1876-1943)《組曲 *Suite*》、Ravel《パッサカリエ *Passacaille*》、G.Fauré《聖歌 *Cantique*》であった」¹⁷と報告されている。この活動からも、ジル＝マルシェックスが積極的に日仏文化交流を試みたことが見受けられる。

そして、ジル＝マルシェックスは、日本作曲界の未来を、以下のように述べて、期待を表した。

「現在まで日本人は、伝統的音楽をもち、しかしもう一方では、西洋音楽に上手に適応してきた。彼らは、西洋音楽を通じ、私が信じる芸術を見つけた。その技術は、すぐに模倣の域を超えるであろう。日本がブラームスの垂流、もしくはドビュッシーの垂流になってはいけない。…これほど著しい習得能力があれば、確実に何か素晴らしいことができるだろう。」¹⁸

ジル＝マルシェックスの日本音楽界に対する思いには、彼による日本音楽研究の土台があり、このような期待へと結びついたといえる。

5. まとめ

1937年のジル＝マルシェックスの音楽活動の大きな特徴は、積極的に日本人作曲家と関わったことである。これは、彼が1925年の初来日から計4度も来日し、日本の音楽界と親交を深めていった結果であるといえる。また、彼は、来日を重ねるごとに日本音楽界の発展を実感し、その進歩をフランスに報告した。

本研究により、1925年、1931年（2回）、1937年の4度の来日におけるジル＝マルシェックスの音楽活動の全貌が明らかになった。1925年の初来日は、薩摩治郎八の援助のもとで演奏会が行われたが、その後1931年の来日は、フランス政府による派遣事業であり、1937年の来日が日本の国際

文化振興会による招聘であったことは注目される。つまり、彼の音楽活動は、個人の営利だけを目的としたものではなく、日仏両国の文化の発展を目的として行われものであったわけであり、その点で、他の来日演奏家と一線を画していたといえるのではないか。また、ジル＝マルシェックスの活動は、日本人作曲家へ影響を与えており、日本音楽界にとっても重要な役割を果たしたと考えられる。

ジル＝マルシェックスの試みた日仏文化交流の中で、もう一つの重要な要素である、彼の日本音楽研究に関して、稿を改めて論じたい。

本研究にあたり、井上さつき先生、沼辺信一氏より資料をご提供いただき、上田泰史氏に資料調査をご協力いただきました。

また、財団法人日東学術振興財団と愛知県立芸術大学より研究助成をいただきました。心から感謝いたします。

ジル＝マルシェックスの音楽活動に関する新聞・雑誌記事一覧

ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動に関するフランスの雑誌記事

発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1937.5	France-Japon	114	Informations Littéraires et artistiques
1937.7		149-151	Une Fête Franco Japonaise à Tokio (le 24 Avril 1937)
1938.1		26	Le Pianiste Gil-Marchex au Japon
1938.1		215-216	Quelques minutes avec le Pianiste Gil-Marchex de retour du Japon

ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動に関するフランスの新聞記事

発行年月	雑誌名	タイトル
1926.1.23	des débats	Les tournées de M.Henri gil Marchex
1926.2.15	Paris-Midi.	Gil Marchex au Japon
1931.2.24	Paris-Midi.	Au départ du Transsibérien avec le compositeur-voyageur Gil-Marchex
1931.4.23	des débats	La musique française au Japon
1931.4.23	Paris-Soir.	Gil Marchex au Japon
1931.8.1	Nouvelles littér	Le théâtre classique au Japon
1931.9.12	Chauteclès	Une tournée de Conférences de M.Gil-Marchex
1931.11.2	Intransigeant	L'art français en extrême-orient. Un ambassadeur de la musique à Tokio
1938.6.2	Caudede	Debussy,Ravel, au Japon

国際文化振興会関連資料のジル＝マルシェックスに関する記事

発行年月	雑誌名	ページ	タイトル
1937.3	K.B.S.Quarterly	1936.10-1937.3	4 Exchange Professors, Lectures and Fellowships
1938.3	K.B.S.Quarterly	1937.4-1938.3	11 Encouragement of Studies on Japan
1939.4	佛蘭西に於ける日本の文化事業	84	第4章 演劇、映画、音楽、スポーツ (3) 音楽と舞踊
1939.7	国際文化	7	佛蘭西の對外文化事業

アンリ・ジル＝マルシェックスの音楽活動に関する雑誌記事(1937年5月～8月)

発行年月	巻号	雑誌名	題名	著者
1937年5月	6(5)	音楽評論	ジルマルシェックスピアノ独奏會	
	14(5)	音楽新潮	5月下旬久方ぶりに現代音楽演奏会を開く佛 國洋琴名手ジルマルシェクス氏	
			音楽會消息	
			編輯室より	
	26(5)	月刊楽譜	五月の演奏會	
1937年7月	26(7)	月刊楽譜	音楽會記録 ジルマルシェクス氏洋琴獨奏會	野村光一
1937年8月	14(8)	音楽新潮	1937年度演奏會春のシーズン總決算	

アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1937年3月～11月)

月日	新聞名	見出し	著者
3月28日	東京朝日新聞	洋琴家ヂ氏来朝 (神戸電話)	
	大阪朝日新聞	四度目のニッポン フランス作曲家ヂルマルシェツクス氏来朝	
3月29日	東京朝日新聞	洋琴家ヂ氏入京	
	讀賣新聞	マ氏都入り 異才ピアニスト	
5月10日	東京帝國大学新聞	近代感覺的 洋琴演奏家	颯田琴次
5月19日	早稲田大学新聞	民謡と現代音楽 ジルマルシェツクス氏が来園	
5月20日	日本大学新聞	佛國音楽使節 藝術科で講演と演奏	
5月26日	早稲田大学新聞	現代作曲家に及せる民衆音楽の影響 ジルマルシェツクスの講演より (1) 感激の名講演 聴衆起立して拍手 ジ氏の講義に熱狂!	山内義雄
6月2日	早稲田大学新聞	現代作曲家に及せる民衆音楽の影響 ジルマルシェツクスの講演より (2)	山内義雄
6月9日	早稲田大学新聞	現代作曲家に及せる民衆音楽の影響 ジルマルシェツクスの講演より (3)	山内義雄
6月14日	一橋新聞	郷土音楽助長が作曲家の役目 ジルマルセツクス氏の講演	
6月28日	東京帝國大学新聞	新しい演奏會 ジルマルシェツクス氏を聴く	辰野隆
		初夏 音楽のつどひ ジ氏象徴主義解剖	
11月25日	三田新聞	ジルマン氏の”サヨナラ演奏会”	

主要参考文献

Honegger, Marc. 1970. “Gil-Marchex, Henri,” *Dictionnaire de la musique* 1, Les hommes et leurs oeuvres. A-K:407.

Waterson A. Richard, William Lichtenwager, Virginia Hitchcock Herman and Horace Poleman 1950. “Bibliography of Asiatic Musics, Tenth Installment” *Note, Second Series*, Vol.7, No.2: 265-279.

生島美紀子 2009 「帰国後：名ピアニスト ジル＝マルシェツクスとの親交」 大澤資料プロジェクト『大澤壽人スペクタクルI ホームソングからピアノ協奏曲まで』：15。

笠羽映子 1988 「日本とラヴェル—日本と西洋音楽をめぐる一考察」早稲田大学比較文学研究所『比較文学年誌』第24号：142-165。

神吉恵美 1998 「ジル＝マルシェツクスのピアノ演奏会」共同通信社『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』：170-175。

神月朋子 2009 「近代日本の芸術音楽とフランス音楽の関わりについての試論：1920年代の『音楽新潮』フランス音楽特集号を対象に」埼玉大学教育学部『埼玉大学紀要』Vol.58 No.2: 249-260。

小林茂 2005 「1925年の器乐的幻覚—アンリ・ジル＝マルシェツクスの演奏旅行と梶井基次郎」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第41号：1-26。

—— 2008 「アンリ・ジル＝マルシェツクスの演奏会詳細追補」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』第44号：145-148。

—— 2010 『薩摩治郎八』 京都：ミネルヴァ書房。

佐野仁美 2010 『ドビュッシーに魅せられた日本人 フランス印象派音楽と近代日本』 京都：昭和堂。

芝崎厚士 1999 『近代日本と国際文化交流—国際文化振興会の創設と展開』 東京：有信堂高文社。

白石朝子 2011 「アンリ・ジル＝マルシェツクスの日本における音楽活動と音楽界への影響—1925年の日本滞在をもとに」『愛知県立芸術大学紀要』第40号：240-260。

—— 2011 「アンリ・ジル＝マルシェツクスの日本における音楽活動と音楽界への影響—1931-32年の日本滞在をもとに」愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース『ミクストミュージズ』第6号：56-72。

染谷周子・杉岡わか子・三宅巖 1999 『ドビュッシー—新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち 1930-1940』 東京：国立音楽大学附属図書館

戸ノ下達也、長木誠司 2008 『総力戦と音楽文化—音と声の戦争』東京：青弓社。

日仏會館発行 1938 『第十四回財団法人日仏會館報告書』 東京：日仏會館。

- 船山隆 1975 「ラヴェルと私たちの時代—その『現代性』と『新しさ』と」音楽の友社『音楽芸術』 第33巻第6号: 18-29。
堀成之 1984 「日本ピアノ文化史-14-ジル＝マルシェックスの来日 (フランス・ピアノの紹介)」日本音楽舞踊会議『音楽の世界』第23巻第11号: 12-19。
柳澤健 1934 「国際文化事業とは何ぞや」外交時報社『外交時報』第70巻第1号: 71-92。

註

- ¹ 堀 (1988)、佐野 (2010) など。
- ² 神吉 (1998)、小林 (1997、2010) など。
- ³ 白石 (2011)。
- ⁴ 「日本の音楽を欧州に紹介するために佛國政府及び外務省の後援によって来日した。また、一方日本に佛蘭西音楽の正しい紹介をその講演と演奏とによつて行ふ使命も帯びている」(1937年5月27、28日明治生命講堂演奏会パンフレット記載)。
- ⁵ 『日佛會館報告書』には「夏季休暇ヲ利用シ、8、9月ハマニラニ演奏旅行ヲナシタリ」と報告されている。
- ⁶ Henri Gil-Morchex. “Les Japonaise et la musique occiden tale”, *France-Japon* No.37(Jan,1939) pp.30-31.
- ⁷ 『日本大學新聞』第275号、昭和12年5月20日付。
- ⁸ 『早稲田大学新聞』第713号、昭和12年5月26日付。
- ⁹ 『帝國大學新聞』680号、昭和12年6月28日付。
- ¹⁰ 芦田均、G.Bonmarchand、花柳壽美、岩崎小彌太、小林千代子、黒田清、牧山美子、松井慶四郎、J.Mazeaud、宮城道雄、岡見富雄、大倉喜七郎、曾我祐邦、大澤壽人。
- ¹¹ 大澤壽人とジル＝マルシェックスの交流に関する詳細は生島 (2009) に書かれている。
- ¹² おそらくジル＝マルシェックス編曲作品。この作品に関する詳細は白石 (2011) に書かれている。
- ¹³ 詳細な説明内容は5月11日の講座と同じであるため省略する。
- ¹⁴ Henri Gil-Morchex. “Quelque minutes avec le pianiste Gil-Marchex”, *France-Japon* No.25(Jan,1938) p.215.
- ¹⁵ Henri Gil-Morchex. “Les Japonaise et la musipue occiden tale”, *France-Japon* No.37 (Jan,1939) pp.31-32.
- ¹⁶ *Ibid.*: 32.
- ¹⁷ Henri Gil-Morchex. “Quelque minutes avec le pianiste Gil-Marchex”, *France-Japon* No.25(Jan,1938) p.215.
- ¹⁸ *Ibid.*: 216.